Osaka University Knowledge Archive

Title	越冬昆虫駆除について
Author(s)	峰野, 幸雄
Citation	makoto. 1973, 4, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86265
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

越冬昆虫駆除について

大阪市環境保健局環境衛生課
環境衛生係長　峰野幸雄

一般に蚊ではイエカ属のものは成虫で、ヤブカの類は卵の状態で越冬することが知られているが害虫の越冬形態は種類によりまちまちである。

とくにゴキブリは南方系の熱帯性昆虫であるから寒さには弱い。摂氏五度以下では寒冷麻ひを起して走行が困難となり、いわゆる越冬状態にはいる。

冬の一匹の駆除は夏の数万匹の駆除につながると云われるように、個体数の少ない冬期に徹底した駆除を行なうことは効果、労力、経費ともに効率のよい方法である。

しかし最近都市においては建築物のビル化と暖房設備の普及から害虫の越冬様相が変ってきた。年中無休でゴキブリが走りまわり、冬の蚊とも呼ばれているチカイエカやチョウバエに絶えず悩まされているビルは珍らしいことではない。

これは北保健所管内におけるビルの実態調査結果からであるが、ビル管理法適用対象である延八千平方米以上の規模を有する八十施設について見ても、その九十％がねずみ害虫の駆除依託をPCO業者に委ねており、外見は近代的なビルであっても内部は幾多の問題点があることを示している。

越冬昆虫駆除と云えば、昭和三十年代に展開された「蚊とハエをいなくする実践運動」の一環のなかで「ササギ取り作業」のことが懐かしく思い出される。特にこの時期は中華人民共和国にはハエが一匹もいないと云うPR効果もあり、地区組織活動が大いに盛り上って、地区婦人層が中心となり一生懸命に便所周辺の土よりハエのササギ取りに精を出したものである。

その後この作業は、ササギの中の寄生蜂も共に殺すなど労多く効が少いことから自然とすたれてしまったが、この時期に結集された地区組織のエネルギーと行政当局の熱意だけは、いつまでも失いたくないものである。

最近は塩素系殺虫剤の制限とか残留薬害の問題などから殺虫剤一辺倒の駆除法は再検討を迫られている。天敵の活用もリバイバルながら脚光を浴びだしてきた。しかし、こうした時代にあっても越冬昆虫駆除の重要性は、地域の環境整備とあわせ少しも変るものではない。